

追悼 守山史生 先生

守山史生さんをしのぶ

平山 淳 (元 国立天文台)

守山史生さんが亡くなった。読者のうち古い人は、東京天文台が戦後すぐに太陽電波の観測を始めその中に守山さんが活躍していたことを覚えているだろう。当時権威だった1955年出版のウンゼルトの教科書に「60, 100, 200 MHzで畑中・守山が観測している」と引用されている。同じ1955年の部分日食を観測したPASJの著者群は、畑中武夫、赤羽賢司、守山、田中春夫、柿沼隆清となっていて、守山さんは多分就職したての若者だっただろう。同じ部分日食でも2010年のときはアルマ望遠鏡が1台のみだったが最初の太陽観測をしていて、その後のフルスケールの観測では約25秒角の分解能で黒点を含む活動領域が見事に得られていることをやはり最若年と称する下條圭美氏が2018年8月号の天文月報で詳しくレビューしている。

わたしは知らなかったのであるが、そのころ問題になり始めていた光学と電波のデータを矛盾なく説明するには離散した場所で光っていると仮定する必要があった。守山さんはそれを1 GHz程度の電波を送りレーダーエコーとして受信すればわかるのではないかと考えた。またH II領域の熱電波をO型星からの励起として議論するなど、幾つかの単独の仕事もされてしている。60年代前半には末元さんと共同でEUVと電波の関連についてしらべている。この問題は今日まで引きずって議論されていて外から見ると果てしない話に見えるが、アルマで部分日食をしっかりと観測すればどうなるのだろうか。

守山さんはいろいろなことをしていて中でも田



守山史生先生 近影

中捷雄氏と一緒に工学衛星たんせい4号からはじめて「ひのとり」衛星のブラッグ分光器を用いて、太陽フレアの鉄のXXVI, XXVなどが数千万度の超高温になっていることを発見している。数論文があるうち筆頭著者になっているものがあって細かい計算や図の作成などもやられたようである。一方、私と一緒にしたバルーンや池谷関彗星の直接写真では私がまとめてこれでよろしいかとお伺いをたてていた。親分に仕えるのにどちらが賢いかではある。ただし特にバルーンではとれたデータがあまりよくないのでこれでよかったのだろう。コロナグラフを口径10から25 cmに拡大して建設する話はニコンとの技術会議が何回もあったのだが、太陽物理部に移って5年もた

たないのに、守山さんが天文台側の話を一手に引き受けて、われわれ光学屋をびっくりさせていた。リオのストップや狭いクーデ室の長短分光器とエッセル分光器など結構細かい話なのにと思っていた。乗鞍観測所長を勤めた桜井隆氏は、25 cm コロナグラフからの業績の特筆すべき点はインドのJ. Shinghさんが10編を超える論文を書いたことであると乗鞍60年史で回想している。それはそうだが10年以上も所長業をやりながらしっかり手を入れたに違いないシンさんの論文の共著者になっているのも驚きである。似たことが南京大学のファンさんと日江井さんについてもいえるだろう。守山さん、十分に25センチはやっていますよ。

乗鞍コロナ観測所に今の天皇御一家がみえたことがあった(写真1)。1967年の夏なのだがそのときの皇太子殿下・美智子妃・浩宮様である。守山さんはほかの天文屋は呼ばないで股肱の臣で固め、狭い10 cm ドームにご案内をした。あとでわれわれに語ってくれたことといえば皇太子ご夫妻は守山さんの説明の間手をつないでいらっしやっただけであった。

守山さんとのお付き合いはずいぶんと長く、乗鞍や三陸での夜長を考えると森羅万象いろいろ教わっているはずであるし、熱した議論もあったはずなのに一つも思い出せない。といって7歳も年下の私が生意気なこと散々しゃべったのは確かであろうが、叱られた覚えもないしほめられた覚えもない。その哲学を聞いた覚えもない。そのかわり末元一家を先頭に何回もピクニックがあって守



写真1 皇太子殿下・美智子妃・浩宮様にご説明申し上げますの守山さん。

山さん一家などと楽しくバーベキューしたことはよく覚えている。

天文台の定年を待たずに大阪学院大学にいかれた。そのすぐ後に三鷹に来られたことがあって、見せられたのは「大阪学院大学経済学部長代理」という名刺である。エッと驚く間もなく「人買いに来てるんだよ」と。それから2~3年もたたないうちに東京天文台、京都大学などから数名の重要人物が大阪学院大で働くのを見ることになる。守山さんは大阪出身というのは知っていたが昔の友達がかんでいるのだろう、よほどの信用がなければならぬ、と。日江井さんは「守山さんは大人だから」。そうに違いないけれどその大人ってなんですかというのが私の疑問である。しかし向こうの世界へ行ったとき尋ねても答えは返ってこないだろう。しかたがない、安らかにお休みください。

守山さんの思い出

川口市郎 (京都大学・名誉教授)

私が助教授であった時代、IAUがプラハであった。この頃私はピレネー山脈にあったPic du Midi天文台で太陽観測をしていたので、私はフ

ランスから、一方、守山さんは日本から来てIAUに出席された。IAUの終了後、私は私の家族と守山さんを連れて、プラハからピレネーまで、パリ

滞在を含め2日に亘る汽車旅行をした。当時私はフランス語に全く不自由はしなかったのでこの様な旅行が可能であった。

この時、私は子供二人と家内と一緒に天文台の麓の町に滞在していた。当時、パリでも日本食のレストランが4~5軒あっただけで、ピレネーの田舎町では、日本とは全く無関係で、日本食はわれわれには全く貴重品であった。私は今でも覚えているが、我が家には一袋のラーメンがあり、病気になる時このラーメンを食べる事になっていて、

長旅で体調を崩した娘が食べた。これを守山さんが見られたからであろう。守山さんが日本に帰国されてから、大量のラーメンを送って下さり、子供たちが狂喜したのは勿論のことである。

その後、守山さんは関西に移って来られ、大阪学院大学教授となられ、私の京大退職後、私もそこに勤めることとなった。この様に、守山さんには非常にお世話になった。守山さんは東京に戻られ、お会いする事無く、訃報を奥様から伺った。感謝とともに、ご冥福を祈ります。

守山さん追慕

日江井榮二郎 (国立天文台・名誉教授)

守山さん、名は史生^{ふみを}、名前を見て“天文の達人”となるべくして生まれてきた人なのかという印象を持ちました。現役の頃は記憶力もよく、世の中で当たり前と思っている慣習や風潮などを思慮深い眼で眺め、説得力のあるご意見を述べる。それ故に、東大天文学教室や東京天文台の諸先生方からの信頼が厚く一目置かれていました。1964年電波部に居た守山さんは太陽物理部へ移り、その将来を託されました。1967年当時皇太子殿下ご一行がコロナ観測所を来訪された時も、観測所長の長澤先生がその大役を守山さんに頼まれました。古在さんも台長になってから守山さんの部屋に出入りする姿を見ることがありました。しかし守山さんは決してその話はしませんでした。話すべきことと、話すべからざることを峻別していました。

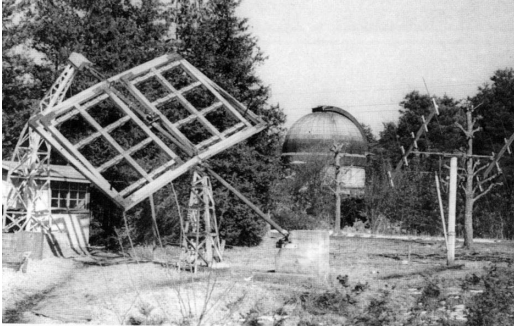
守山さんは昭和2年3月生まれ、昭和18年3月大阪の北野中学4年修了後4月から第八高等学校に入学、八高を昭和20年3月に卒業後、4月から東京大学理学部天文学科に入られた。当時米軍の空襲が激しく東大天文学教室は諏訪に疎開していましたが、新入生はどこに出向くか不安だったようです。新入生向けの諸連絡の郵送は、焼失した



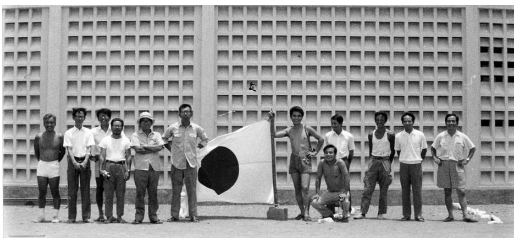
萩原雄祐先生に25 cm コロナグラフの説明をしている守山さん。

下宿には届かなかったようです。天文学教室が宿舎としていた諏訪の綿屋旅館にやっとたどり着いた数日後、小平邦彦先生が畑中先生を訪れ、炬燵を囲んでのお二人の会話を隅で小さくしながら謹聴したと話してくれました。

昭和24年3月東京天文台に勤務し、畑中先生や鈴木重雄さん(天文台を退職してオーストラリ



東京天文台での最初の電波望遠鏡。



モーリタニア日食観測隊員（東京天文台，京都大学，水沢緯度観測所）。

ア電波物理研究所に転職）と一緒に 200 MHz の赤道儀式太陽電波望遠鏡を作られた。これが東京天文台での電波観測のスタートです。この望遠鏡には駆動装置がなく、当時学生であった私共は、その望遠鏡を太陽の方向に向けるアルバイトをしました。IAU 総会の時、Waldmeier が退職するのでチューリッヒ天文台では従来の光学望遠鏡による黒点観測の面倒は見ないという議論が行われました。黒点数の変動は光学観測と電波強度とはほぼ同じなので電波で黒点観測を行うからという粗い議論でした。守山さんはそれに反対されていました。その後 IAU の依頼を受けて、1978 年世界中の太陽観測データの編集・発行をするようになり、守山さんはご自分で編集をしていました。

守山さんは人の才能を生かす道を見抜くことが上手でした。森下博三（通称かもしか仙人）さんには、彼のカメラへの凝り性を見抜き、25 cm コロナグラフ鏡筒に焦点距離 5 m の対物レンズを取り付け、太陽の彩層写真を撮るようにし、科学的



モーリタニアの勲章。

な貢献をも残すようにされました。彼の撮影した画像は Tandberg-Hanssen の本にも掲載されています。守山さんは、1973 年 6 月 30 日モーリタニア日食と 1976 年 10 月 23 日オーストラリア日食の 2 度、観測隊長として出張されました。モーリタニア日食ではフランス、スイス、ロシア、イタリアからの天文屋と一緒にサハラ砂漠のアタールにある兵舎が観測隊員用宿舎としてあてがわれ、日中 43 度ほどの高温下での作業でした。モーリタニア政府との交渉、通関、原住民との話し合いなどはすべて守山さんが行い、守山さんの文化交流への功績大なりとモーリタニア政府に認められ、勲章を受けられました。しかし日食観測の過労から帰国途中で体調不良となり、機内食で出されたそばつゆに救われたようです。帰国後急性肝炎と判断され 3 ヶ月ほど入院されました。

年末には守山さん宅でパーティをしていただき、皆で甲論乙駁の楽しい歓談の時をもちました。今生にて、信頼していつでも相談ができる人がいるという安心感を抱いていましたが今はそれも失いました。ご冥福を祈ります。